

六日の菖蒲^{あやめ}

年を取るにつれて、私は自由意志という概念をますます疑うようになった。人間はおそらく自分の人生のある部分は支配できるかもしれないが、それにもかかわらず、運命の歯車は容赦なく回転していく。

私は幼い頃から奇妙な呪いがかけられていると感じている。その呪いは、常に時機に遅れるというものだ。実際には、生まれる以前からすでにかけていたのだろう。母と父は長年妊娠をしても、なかなか受胎できなかった。ある日、五十歳の母はようやく身ごもった。本当に奇跡だった。両親は毎日神様に感謝し、育児の準備をした。授かった子宝との三人暮らしにわくわくしていた。

しかし、奇跡は悲劇を招くようだ。翌年の五月五日、父は突然の交通事故に遭い、命を奪われてしまった。悲しむ時間もなく、母は同日破水した。次の朝、彩夢^{あやめ}と名付けられた私が産声を上げた。私は楽しみに待っていた父と会うには、残念なことに一日遅かった。

子供の頃、おっちょこちょいのおてんば娘だとよく言われた。お隣さんの刈り込まれた芝生を走り回ったし、他の子供と喧嘩したし、近所の人や先生にしばしば迷惑をかけてしまった。一番他人を悩ませたのは、常に遅れるという特徴だ。何でもぐずぐず先延ばしにしたり、いつも予定の時間より遅れて来たりしたことは、芳しくない評価の元となった。

私が心配させることばかりしたのに、母は変わりなく私を愛してくれた。寡婦とはいえ、少しも嘆く様子を見せず、仕事だけではなく育児にも精魂を傾けていた。教育の重要性を強く主張するにとどまらず、勉強のあらゆる局面で手助けしてくれた。私が苦手な科目があれば、母は自分でそれを夜通し勉強しておき、私を指導した。特に、母は私の遅刻魔の癖を注意し、私がサボったり怠けなくなった時は怒らずに激励した。そんな風に、私の名前のように成功に彩られた夢が叶うように、私のために心を砕いてくれた。母のおかげで、私は次第に母のように穏やかな女性になり、未来に向けて真面目な学生にもなった。

いよいよ大学入試の季節が来た。精一杯勉強して準備したが、あいにくインフルエンザにかかった。そのため、私は志望校への入学機会を逸してしまった。残念だったが、挫けずに浪人し、翌年ついに受かった。母はその朗報を聞くや否や、椅子から飛び上がり、喜色満面で私を抱き締めた。その瞬間の涙の溢れた目と鼻が高そうな顔は、忘れるべからざる思い出だ。

母は何よりも私の卒業式に参列したいと思っていた。なぜなら、卒業式は私たちがずっと目指してきたことの集大成だったからだ。また、娘の将来への鮮やかな扉だと考えていた。しかし、人間はどれほど願おうが、運命の機ですでに織られたものを変えられない。私が大学に入学する直前に、母は脊髄腫瘍と診断された。私は休学しようとしたが、母は絶対に許さず、大学教育を終えるように懇願した。だから、私は名残を惜しんで大学生活を始めた。

毎日神社で母の病気が治るように祈願した。それにもかかわらず、なかなか快方に向かわなかった。母は三年間腫瘍と闘い、命に執着していたのに、癌がもう体中に転移したせいで、最後が差し迫っていることを認識していた。私は母の末期の水を取りに故郷に帰った。母は臨終に「彩夢、自分の人生の道は自分で切り開け」と願った。そして、母は私の卒業式に参加せずに息を引き取った。

自分で自分の運命を支配できるということを必死に信じたかった。しかし、心に疑いの種が蒔かれた。四年前に浪人しなかったら、私が卒業する時に母はまだ生きていたものを。こんな悲惨なところでも私が遅れる……。

それから、涙を懸命にこらえながら大学の勉強を続けた。その時、独りの私にはいつもこの家は少し広すぎると感じた。私は主に自分の部屋と台所で過ごし、他の部屋にあまり足を踏み入れていなかった。特に、母の部屋のドアの取っ手に手を伸ばすと、悲しみに圧倒されて部屋に入ろうにも入れなかった。だから、しめ縄がかかったように、母の部屋の前を通った時、入る代わりに母の魂のために少しの間、心の中で祈った。

やがて、大学最後の年を終え、文学部の英文学科を卒業し、翻訳の仕事に就いた。長年英語を勉強したものの、かなり頭を使う仕事なので、私は往々にして自分が果たしてその仕事をする資格があるのかと疑問に思った。それにしても、やりがいのある仕事を持ち、安定した生活を送れたから、振り返ると、その時はやはり幸せだったと言えるだろう。呪いのことはもうほとんど考えていなかった。

しかし、考えなかったからといって、頭から消えたというわけではない。運命の歯車に従って、人生が変化するのではないか。平穏な生活を掻き乱したのは、彼と出会ったことだ。私が入社してから六年後、桜井春人^{はると}が私の課に異動してきた。私より十五歳年上の先輩なのに、すぐに意気投合した。さらに、端麗な容姿といい、明晰な頭脳といい、いつの間にかこの同僚に惚れてしまった。運命だろうか、春人も私のことを好きになり、私たちは付き合い始めた。

恋も制御できないものなのではないか。だから、年齢の差がどんなに大きかろうと、他人がどれほど非難しようと、相性が良い人と恋に落ちることができてありがたいと思った。それから、春人と数年気楽な日々を過ごした。一緒に日本の至るところを旅して回ったり、将来に思いを馳せて語り明かしたりした。まるで理想的な恋愛であった。

それなのに、二人の間で唯一争点になったのが、子供のことだ。私は絶対に子供が欲しかった。粉骨砕身して育ててくれた母のように、自分も子供を育ててみたかった。特に、母の例に従い、蓄積した経験を伝え、子供の成長を促す環境を作り出したいと熱望していた。しかし、私が育児について話しかけたそばから、春人は話をはぐらかした。ある日、四十六歳の春人は三十一歳の私に、「僕はもう子育ての気力がないな。君ほど若くないせいか……。」とついに告白した。二人がそこまで築いた未来へと続く道は、その一言でのみが当たったガラスの如く砕けてしまった。

夢の輝きが消えたら、冷めた現実に対応するしかない。その日、まだお互いに愛していながらも、その炎は燃え尽きた。そのため、春人が海外赴任を命じられた時、私は何の反対もせず行かせた。旅立ちの日、春人を空港まで送り、別れの挨拶をする際に、しっかり抱き合った。私は彼のことを隅々まで心に刻むために、指をその光沢のある黒髪に通し、春人らしい微かな梅の匂いを目一杯嗅いだ。「またね」の一言で、海外へ門出する春人を見送った。一生一緒に過ごすには、私は彼の人生に到来したのが相変わらず遅かった。

そして、大変驚いたことに、同年春人の子供を妊娠していたことに気づいた。海外で活躍している春人を思いやり、何も言わずに産むことにした。母の強い意志を思い、私も決心がつき、母親と仕事を両立させる生活に足を踏み入れた。九月十日に女の子を授かり、菊という名前を付けた。

菊は私にそっくりな子だった。おっちょこちょい。遅れがち。まるで私の子供の頃と鏡映しであった。その欠点を受け継いだ菊を、私は掌中の玉のようにかわいがっていた。会社に勤めるかわら、菊の生来の癖を抑えようとしたり、正しい価値観を植え付けようとしたりして努力した。働く母親の人生はずいぶん疲れるだろうと予想はしていたが、思ったよりも骨が折れた。毎日早く家を出、頭を働かせる翻訳の仕事を頑張った。家に帰ったら、寸暇を惜しんで菊の面倒を見た。菊を寝かしつけたら、遅くまで翌日の準備をしなければならなかった。常に寝不足な私は、時々菊を本当にちゃんと育てられるかと考え、悩んだ時もあった。しかし、菊の笑顔を見るだけでそのような気持ちは溶け、疲れも取れてしまった。我が子は我が子なのだ。私の役割はただ支えるのみである。

ある日、菊を学校に送った後、私は家の大掃除を始めた。今まで母の部屋の掃除をいつも飛ばしていたが、今回は、嘆く時間はもう十分で、長い間延び延びにしていたと考え、母の部屋を片付けることを決心した。だから、私はおずおずと長年神聖な空間のように扱った部屋に足を踏み入れた。

室内は記憶している様子とほとんど同じであった。私は部屋に飾ってあるものを見回すと、昔の思い出が溢れてきた。ナイトテーブルに、赤ちゃんの私の初めてよちよち歩きする写真が置いてあった。クローゼットに、母のお気に入りの香水のわずかな残り香がある衣服がかかっ

ていた。そして、掃除を始めてしばらくして、私が生まれる前の母と父の遺品を発見した。押し入れに新婚旅行の写真、父が書いた「彩夢」の書道作品、母へのラブレターが隠れていた。

母の机の埃を払おうとしている矢先に、机の上に壁に寄りかかっている本が目に入った。この本を見たことがなかったので、私は少し不思議に思った。わざとここに置いてある気がした。もっと近づいて見ると、本に母の優美な字が書いてあるメモが貼ってあることに気づいた。

「あやちゃん、子供を迎え入れるつमりの時、この日記を読みなさい。今は言いにくいことが書いてあるからね。」

メモを読んだ途端に、私はクスクス笑った。さすがいつも平静な顔をした母だ。言いにくいことをそのように間接的に伝えることにしたようだ。そして、さすがいつも遅れる私。もう子供ができた私は予定された時間より遅く発見した。そして、日記を開いた。

最初の数ページから、菊がどうして私にそっくりなのかが理解できた。小さな母もたびたび授業に遅刻したり、電車に乗り遅れたりした。それは遺伝子による性格なのではないだろうか。読めば読むほど、多くの類似点が目についた。祖母が遅延分娩の合併症により他界したので、母は一人親家庭で育った。初恋の人はもう彼女がいた。病気のせいで奨学金の申請に間に合わず、大学に入るお金が足りなかった。個々の出来事は異なったが、常に遅れるという底流は私と同じであった。これはただ偶然の一致というわけではないのではないだろうか……。私の好奇心はだんだん不安に変わった。

ついに最後のページに至った。このページは、見慣れた母の字で書いてある。つまり、私が生まれた後に母が記録したものだ。「ここに書くのは久しぶりだね。光陰矢の如し。娘の彩夢ちゃんはもう高校生だ。今志望校に入れるようにがんばってる！時々自分の呪いをあやちゃんに遺伝させたか心配になるけれど、あやちゃんならどんな障害も乗り越えるにちがいない。入学しようが入学するまいが、愛する子供のおかげで私はこの人生をもう充実したものにできた。」

これを読むなり、驚愕した私は日記を思わず落としてしまった。そして、思考が乱れ、床に倒れた。ただの妄想だと思っていたが、まさか生涯を悩ませる呪いは本当に存在するのか。そうなら、なぜ母は秘密にしたのか。呪いという言葉は母の口から出るのを一回たりとも耳にしたことははない。もしかして無意識に菊にこの呪いを遺伝させてしまったのか？

感情に走ってはだめだと心の中で言い、ちゃんと考えるために上半身を起こし、落ち着きを取り戻した。母は果たして何を伝えたかったのか。まず、呪いのことを知らせるのが目的だろう。もし私が成長している間に呪いの存在が確認されたら、前向きな性格が影響を受けたかもしれない。呪いの束縛を認めたら、やる気が消えたかもしれない。その可能性を避けるべく、母は内緒にしておき、かえって自分の運命を自分の手の中に納めるように激励してくれた。私がもう大人になってからその日記を見せるつもりだったのだろう。

では、何ゆえに「子供を迎え入れるつमりの時」まで伝えたがっていなかったのか。母は私の成長を見守り、親子の類似点に気づき、その呪いが遺伝するものだと悟った。だから、日記により、母は次の世代に呪いをかけないように子供を産むことを遠慮するように忠告したがつたように思えた。

お母さん、申し訳ない。わざわざ用意しておいてくれた日記を今更見つけた。菊はもう世間に連れ出され、生涯遅れ呪いの重荷を背負わなければならない……というより、私が菊にその負担を強いた。私は最悪だ。

悄然と腰を曲げ、日記を床から拾い上げた。あれ？裏にも何かが貼ってあった。「あやちゃん、生きがいのある人生を送ってね。孫に会うのが待ち遠しいよ～　—お母さん」

私は後ろに数歩よろめいた。まさか母の意図した意味を全く誤解したのか。母は呪いを遺伝させてほしかったというわけなのか。さっぱり理解できなかった。

母の書いたものを全て再び読んだ。「自分の呪いを遺伝させたか心配になるけれど、あやちゃんならどんな生涯でも乗り越えられる」「私はこの人生をもう充実したものにできた」「生きがいのある人生を送ってね」「孫に会うのが待ち遠しい」この文を何度も読み返し、やっと母の意思が分かった。母は呪いの存在を認めた。それにもかかわらず、自分と私のために充実した生活を築き上げた。というのは、呪いがあるとうるまいと、人生は生きがいがあるからだ。なので、母は私が呪いを認識しながら子供を生み育てるように望んだのだ。

振り返ってみると、私の今の人格はその呪いに形成されたのではないか。もちろん呪いにより数々の辛酸をなめた。父と会ったことはなかった。恋人とも別れた。その一方、呪いのおかげで幼い頃から精一杯頑張った。母はその呪いを認識していたからこそ、遅れがちで怠ける癖を改めるように優しく励ましてくれた。おかげで、私は勉強に奮励努力したので、一流大学に入り、安定した仕事も得た。さらに、夫がいないという障害を克服するために、菊のことに身も心も捧げている。つまり、自分の切り拓いた道をひた走ったから、今の私があるのだ。

運命は情け容赦がない。私の家の場合は、運命が下した呪いが解けないようだ。それにもかかわらず、人間はできるだけ力で自分の生きがいを見出し、幸せな生活を送ることができる確信している。

今日は菊の大学への旅立ちの日である。私は駅まで見送り、別れの挨拶を交わした。菊は駅舎に入る前に私の方に振り向いた。その晴れやかな表情を見ると、私は前途洋々たる菊を心から誇りに思った。菊の姿が消えてから、物思いに耽りながら帰り支度に取り掛かった。

「お母さん！電車が出ちゃった！」と聞き慣れた声がした。

「乗り遅れたの？じゃ、ここで待とうか？」

呪いはこんな風にときたま忘れた頃に我々の生活に首を突っ込む。どんな運命が我々を待ち受けているのかは人間には決して分からないものだ。恐らく母のように菊の卒業式に参加することができない可能性だってある。しかし、そのような制御できないことを心配するのは意味がないと思う。私はもうこの人生を支配できるあらゆるところで頑張ったので、満足だ。それ以外は運命に任せるわ。